

最優秀賞 福井地方法務局長賞

中央大会 法務省人権擁護局長賞

友達が教えてくれたこと

高浜町立高浜中学校 三年 坂下 千遥

私たちの学校では、人権学習に力を入れています。私は、人権を考える授業が好きです。だから、授業でのワークシートには、自分の思いをたくさん書いてきました。

でも私の心の中には、「自分にとって差別は、あまり関係がないな」という気持ちもありました。自分の心に差別心はみじんもないと思いこんでいただけで、友達を傷つけてしまったことがありました。

私の友達には、「ハーフ」の子がいます。私はその子を「ハーフ」として特別な態度で接したことはなく、普通にかかわっているつもりでした。でもある日、私はその子に言いました。

「いいなあ、ハーフの子は運動ができて。あんたも足が速いし。」

何気ない一言のつもりでしたが、

「何でそんなこと言うん。ちはもそういう人やったん。」

と言われました。いつも明るく、おもしろいことを言って笑わせてくれる彼女が、突然悲しそうに、真剣にそう言ったので、私はとてもびっくりしてあわてて、彼女に謝りました。その日一日、彼女はずっと悲しい顔をしていました。私は、かける言葉がありませんでした。

私はとてもショックでした。人権学習が好きで、ワークシートにもぎっしりと自分の考えや思いを書いてきたのに、それは全部うそだったのか、と思いました。自分の口から、あのような言葉が出てしまったことも、とてもショックだったのです。

また、三年生になって、「小さなステッカー」という資料を読んで人権学習に取り組みました。あるお母さんが、「身元調査お断り」のステッカーを貼ることができないというような内容です。そのお母さんは、自分たちが被差別部落の人だと疑われるのではないかという不安があるのです。その授業で先生から、

「あなたがこのステッカーを貼る時、お母さんのような不安はありますか。」と質問されました。私はその時、「不安はある」と思いました。

私は、そのお母さんが「不安に感じていること」が、差別そのものだと思います。ステッカーを貼ることで部落の人だと間違えられ、自分も差別されるのではないかと恐れているのです。

「自分と部落の人」という一線を引いた時点で、差別をしていることになると思います。

私は、そのお母さんの言動が間違っていることは分かっていました。でも、やはり、それと同じような不安が自分の心の中にもあったのです。「不安がある」、これが私の正直な気持ちでした。

やはり私にも、人を差別する心があったのです。私は自分のことを、差別心が全くない、純粋な心の持ち主とまでは思っていまらなかったが、人を見かけで判断したり、「あの人は～だから」と決めつけたりしてはいないつもりでした。でも、それは自分の勘違いでした。友達に対する軽はずみな発言や、ステッカーの授業での自分の本音が、差別そのものであることに気付いたのです。

差別は、人の心の中で見えないところで芽を出して、気づかないうちに大き

くなっているものだと気づかされました。そして、その差別の芽に対して知らぬ間に、水や肥料、育ちやすい環境を与えているのは自分自身なのです。私はいつの間にか差別心を育て、その存在を認めていました。「自分にとって差別は関係ない」、そう思っていたことが恥ずかしくなりました。

私は、差別心がない人などいないと思います。いろいろな場でのふとした考えが、差別につながることもあります。もし、小さな小さな差別の芽に気づくことができれば、その芽を摘むことはできます。しかし、多くの人々は、差別心が自分の心にしっかりと根付いてしまってから気づくのではないのでしょうか。

私は、友人を傷つけた経験や学校の人権学習から、自分の差別心に気づくことができました。これ以上、自分自身の差別の心を育てたくありません。だからまず、自分のために人権学習に取り組んでいかなければいけないと思います。世の中や他人のためではなく、自分のために、人権について学びたいと思っています。

心ない発言で友人を傷つけてしまったことを思い出すと、私は今まで人権学習で何を学んできたのだろうと情けなくなります。そして、彼女にとても申し

訳ないです。彼女はきっと、私以上に悩んでいたことでしょう。しかし、私の大きな間違いに気づかせてくれたのは彼女の言動でした。彼女が、自分自身の心の痛みと引き替えに、私の間違いを指摘し、正してくれたと思っています。今では、彼女に対する感謝の気持ちでいっぱいです。

私はもう誰も傷つけないたくありません。心の中の差別の芽に気づける大人になりたいです。